



75年生まれ。真宗大谷派の僧侶。寺ネット・サンガ、葬送支援ネットワークの代表として貧困や自殺、孤独死の問題に取り組む。
—遠藤真梨撮影

なかした 大樹さん

僧侶

今まで、2千人以上の方の死にかかわり、死に顔を拝見してきました。

真宗大谷派（東本願寺）で住職資格をお預かりした後、28歳のときに新潟県の仏教系ホスピスに宗教者として勤め、数百人の患者のみとりをしています。その後、ボランティアの葬送活動を始め、自殺、孤独死の現場にも数多く足を運びました。

多くの死をみとり、気づいたことがあります。死ぬ間際には、その人の生前のすべてが見えてしまう、ということ。本人の前で家族が遺産相続の争いを始めることもありました。夜、電気を消さずじっと手を握っていて欲しい、と頼んできた元やり手ビジネスマンもいました。

孤独死では、60代の男性の

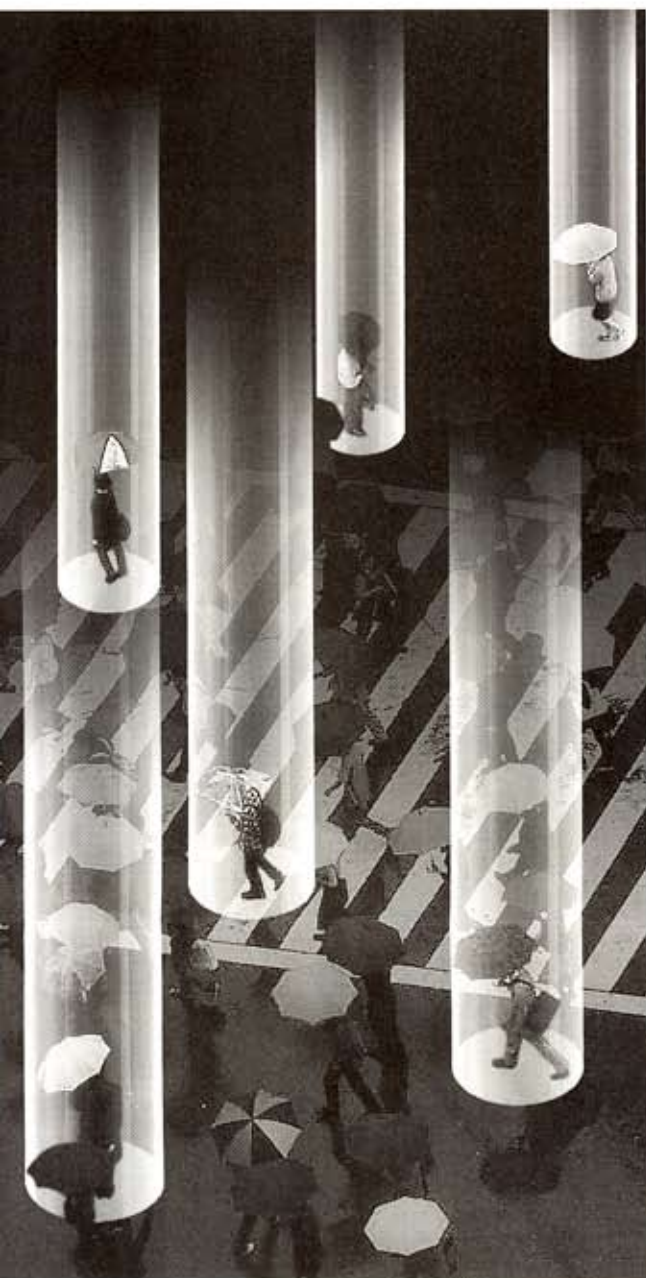
ケースを多く見えています。仕事の肩書が外れ、気付けば家族もない。家に引きこもり、アルコール依存になり、ゴミ屋敷化する。社会とのつながりを自ら絶って死んでい

く。企業というタテ社会で競争に明け暮れてきた男性たちには「ため」がないのです。一昨年3月、群馬県渋川市の高齢者施設「静養ホームたまゆら」の火災で10人が死亡した事件で、自発的に現地法要を行いました。焼け跡に祭壇を組んで、犠牲者の方々の写真を探したのですが、まったく見つかりませんでした。人とのつながりがわずかでもあれば、写真を撮る機会はあるはず。たまゆらの住人たちには、そういう関係性がいっさいなかった。まさに「孤族の国」です。

人は生きてきたように死んでいきます。死という「点」ではなく、それまでの何十年の「線」を見ないといけません。死から生を見つめて、社会を変えていかなければならない必要性に気付きました。所在不明高齢者の問題で、多くのメディアにコメントを求められましたが、何を今さら、というのが正直な気持ちでした。現場にかかわる人たちの間では、意外性はまったくなかった。何十年も前からこうなるとわかっていたのに、先送りを続けてきたわけですから。そういう社会を作ったのは自分たち。誰が悪いということではありません。

私たちすべての問題です。1970年代に在宅死と病院死の数が逆転するまで、日本人の多くが家で亡くなっていました。今では死を病院に外注し、生々しい現場を見ずにより過でしている。ラテン語の「メモメント・モリ」（死を想え）という言葉をよく考えます。生と死は合わせ鏡のようなもの。死を直視しないことで、生を真剣に考えない社会になってしまったのではないのでしょうか。

多死の時代を迎え、社会全体が死と向き合わなければならぬ時代になります。家族や親しい人が亡くなった時、その痛みを「縁」にしてつながることができないか。ビジネスのように葬式を執り行うのではなく、宗教が人々の悩みや孤独、悲しみにもう一度寄り添うことができないだろうか、と考えています。宗教は両刃の剣で、カルトに見られるように危険な部分もありますが、例えば米国ではキリスト教の教会がセーフティーネットのひとつとなっている。今後、かつての駆け込み寺のように、人と人をつなげていくような「講」「結」のような場をどう作るか。宗教者が問われています。（聞き手・真鍋弘樹）



コラージュ 寺島 隆介 / The Asahi Shimbun